「今日の説教、聴き手のために」　2014/1/19　明治学院教会（326）

（このプリントは，説教ごとに作っているものです）　牧師　岩井健作

『信仰の益』　ヨブ記２１章１節－１５節、ローマ８章２６節－３０節。

１、　ヨブ記のストーリーを思い出して下さい。ヨブは神を恐れる全き信仰者でした。それにも拘らず、一朝にして、全財産を失い、七人の子供たちと死別し、自身重病に苦しみました。序章、Ⅰ-2章の物語の結論は「神から幸福もいただいたのだから、不幸もいただこうではないか」（2：10）とのヨブのゆるぎない信仰でした。しかし、不条理の苦難を巡って、三人の友人たちは「因果応報」の固定観念でヨブを責めます。「不条理ではない、どこかで罪を犯しているのだ」と非難します。そこから長い対論のドラマが３章から４２章にわたって展開されます。そのテーマの一つに「ヨブはいたずらに（利益もないのに＝新共同訳）神を恐れましょうか」（1：9、サタンの言葉）という友人たちの御利益信仰こそが信仰の一般的通念だとの考えが披露されます。現に私たちの周りの諸宗教は、健康、入試合格、仕事の成功、家内安全、商売繁盛の神を説きます。しかしヨブ記は不条理を含めて神と対峙するヨブの実存的あり方に、神への関係（13：3）を示しています。２１章は、３人の友人との対論を２回づつ繰り返した後の、６回目のヨブの弁論の箇所です。

２、　ヨブは、友人たちが何回も固定観念化した言葉でヨブに「説教」するのに我慢がならず、「わたしの言葉を聞いてくれ、聞いてもらうことがわたしの慰めなのだ」（21：2）と訴えます。ここには「聞くことの関係」の大事さが言われています。「あなたがたはくりかえし聞くがよい、しかし悟ってはならない」（イザヤ6：9）とありますが、「聞く」ことは人格的衝撃を大事にすることです。「あ、分かった」と自分の知識の整理棚に納めて満足してはならないのです。ヨブは「我慢して、わたしに話させてくれ。」（21：2）と言います。

ヨブは「慄然として、身震いが止まらない」（21：6）この世の現実を友人に訴えているのです。それは6節から13節の「悪人が栄える」この世の姿、そして「われわれはこれ（神）に祈っても、なんの益があるのか」（口語訳 21：15）と言い放つ「悪人」の存在のやりたい放題の不条理を、3人の友人の綺麗事の「神学的理解」にぶつけています。

３、　ヨブ記はその通俗的因果応報の信仰理解、つまり人生の損益計算書に出てくる黒字だけを「益」とする考えを批判します。ヨブ記はこの「益」をしばしば問題にしています。（１：１９，２１、２１：１５、３４：９、３５：３）。この「益（ヤータブ）」は「助けになる、役に立つ、益になる（商業用語）」という意味で、ヨブ、イザヤ、エレミヤでは殆ど，信仰から見て「益ではない」「役に立たない」という否定的な用い方をされています。イザヤ４８：１７では主が「あなたを教えて力をもたせ（益）」と肯定的に用いられています。これはアッシリアがバビロニア捕囚のイスラエルを解放する文脈です。つまり、地上の損益計算書を相対化し、天上にまで広げそれを含めた「益」「力」を考えます。元来信仰の「益」とは地上では逆説であり、無益の益であります。私たちは「益」の尺度を少し大きく取るように　信仰の世界へと召されているのではないでしょうか。「神は・・・・万事を益となるようにしてくださることを私たちは知っている」（ロマ8：28）とは、危機におけるよりどころです。